

進化新論

ゼー・デー・デビス

013667-000-7

97-104

進化新論

ゼー・デー・デビス/著

M36

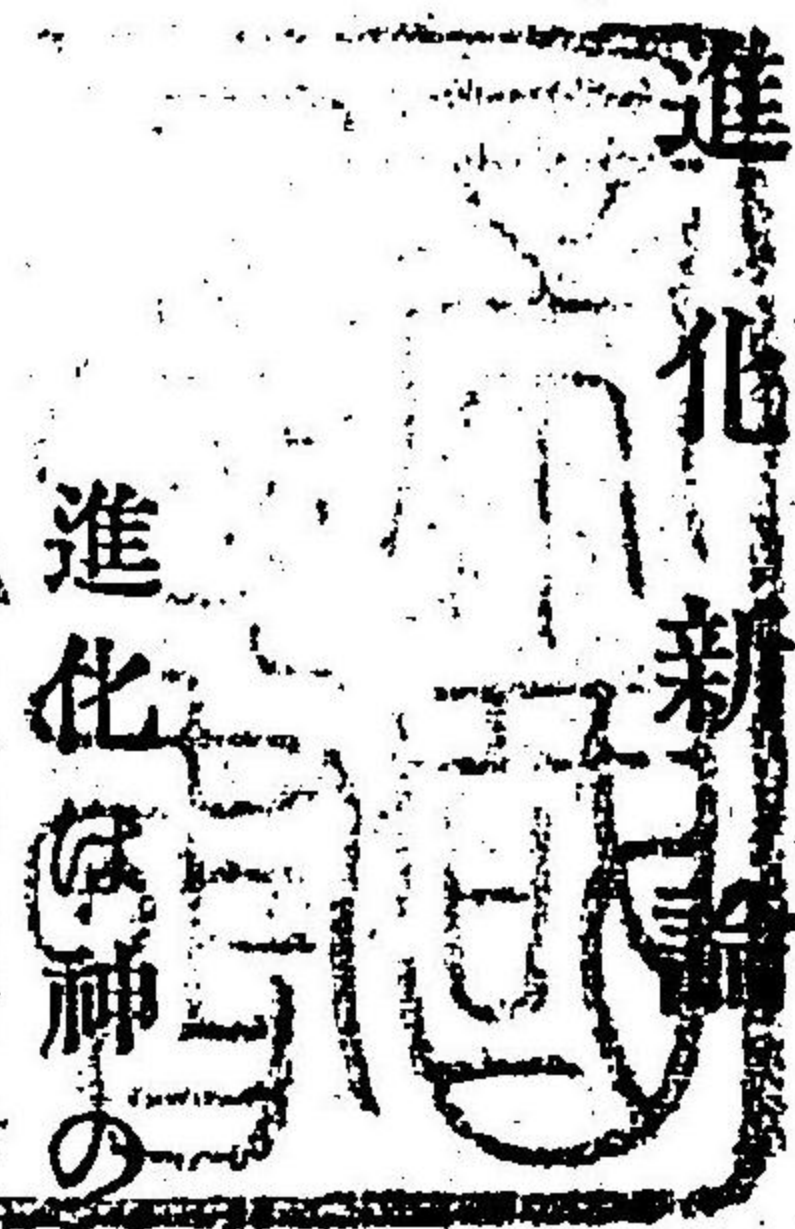
ABA-0137





97-104

進 化 新 論



進化は神の行動の一樣態

神學博士 ゼー、デー、デビ



十九世紀に於て廣く行はれたる謬説の一は吾人もし事物成立の過程をだに發見し得ば之が原動者の有無の如きは問ふを要せずとなすの論なり、換言せば科學世界にありては概ね神の觀念を廢棄して之に代ふるに理法若くは自然の觀念を以てしたるにあり。

然るに廿世紀に入るや、科學者、哲學者等の多數は殆んど皆な期せずして「超絶的なる神は自然界に内住し一切理法の背後に存在す」所謂自然の理法なるものは神の一定せる行動の様式たるに過ぎずて「大眞理を宣言するに至りたり、五十年前流行せる自然神教的の見解即ち神を

進 化 論

の有力の言を以て宇宙万有を創造し、物質に賦するに勢力を以てし、然る後ち宇宙を其自ら爲すに任せたりとする思想は漸く廢棄せられ、神に對する更らに數層高尚高貴なる思想の爲めに代られんとしつゝ、あるを見る。キリストが我父は今に至る迄働き玉ふ、我も亦た働くなりと、云ひ玉ひしものは蓋し甚深の意義あるなり。吾人は今日人間の實驗室に於けるが如く神の大なる實驗室に於ても亦た均く事業の複雑なればなるに従ひ作品の巧妙なればなるに従ひて、其室を企圖し、其複雑なる機關を發明し製作し且つ使用する所の化學者の之れに相應して偉大なるものならざる可らざるの意を益す明白に認識す。

現時最も明敏なる形而上學的思想家の一人、教授ジョン・バスカム千九百〇二年四月出版「ビブリオセカ、サクラ」中の超自然論二百三十八ページ及二百四十一ページは曰ふ、世界は時々刻々神の思想と感情とを以て充覆せらるゝ、間斷なき創造なり、而して恒に内部より新始せられ毫も

進 化 論

外部より支配せらるゝ事なし、物質は吾人と神との間に介在する無關係の外物にはあらずなりぬ、物質其ものゝ中に神の遍在し玉ふ事は吾人に取りては既に明確なる事實となりぬと。又曰く、超自然は吾人の見得る限りに於て三様の形狀を取る、自然界に於ける創造的增加(如何に巧妙なる學説も拒避する能はざるもの)と奇蹟と祈禱に對する答是れなりと。

進化説は最近五十年の間、神及び超自然に對する信仰を打撃するに於て恐らくは他一切諸説の勢力を結合するも之に及ばざる程なりしが、而も亦其の近き將來に於て神及び超自然に對する信仰の保障の一たるに至るべきは殆ど疑なき所なりとす。

サー、ジェー、ダヴリュー、ドウソン氏が近著「モダーン、アイデアス、オヴ、エヴンリーション」は此の點に關して大に學ぶべき所ある書籍の一なり、著者は之れによりて裨益を得たると多かりしが故に隨時此冊子に於て同

進 化 新 論

氏が論旨を引用せんと欲す。
進化には大なる真理あり。而かも所謂進化論者の學説は悉く真理なりと云ふの理由はある事なし。進化なる語は往々其主張者の或者によつて神を其宇宙より放逐せんが爲めの、従ふて人類の威嚴と價值とを卑下し滅却する所の咒符的文句として用ひられたり。ハックスレー氏は人類に銘するに一失錯物としての、猿猴の迷子としての焼印を以てしたり。ダルフィン¹は進化的觀念を講究研鑽するの餘り、其靈的性質の殆ど全く萎縮し了るを致せり。彼は其死する前、約一年の頃に書せる手簡に於て神の存在に關する疑惑を述べて「誰れか猿の心の辨證を信じ得んや」と云ひき。博士ドウソンの「ダルフィン」は英國博物館の階段に石像として立つに方つては、神の像に似て造られたる高貴の風貌を具へ、心裏優かに上の天と下の地とを懷抱するに足る能力あるを思はしむ。然るに其近時の傳記に現はるゝに及んでや、吾人は彼が靈的萎縮の爲めに痲痺

進 化 新 論

せられ、明を奪はれ、獄に投せられ、唯物哲學の磨車に繫がれ、而して茲にサムソンの如く本來優美秀麗なる一切のものを粉碎して無味無形なる微塵と爲すの運命を負へるを見る。彼れは生前に於て寧ろ彼が一時の名譽は廢趾の中に埋るも自ら其手を以てダゴンの堂を崩し、彼が高尙なる眼を抉し去りたる殘酷の讐敵に報ゆるを得たりせば可なりしものを惜しからずや」と云へるもの善く吾人の意を得たり。
ダルフィン哲學に對する有力の反動は現時頗る其歩を進めつゝあり、殊に獨逸に於て然りとす。博士エー、デンネルトは此間ダルフィン哲學に反對なる多數の博物學者、動物學者、生物學者等の意見を包有する小著作を出版したるが其中に云ふあり、之を概観すれば舊式なるダルフィン説は既に歴史上のものとなりつゝあり、吾人は現に其死の苦悶を目撃しつゝあり。ストラスベルグの動物學教授博士ゴエツテがウムシヨウに於て公にしたるダルフィン説の沿革史にはダルフィン説を以て既に發

進 化 新 論

達の四段階、即ち(一)大なる熱心を以て接對せられたる初期、(二)其繁昌して周く採用せられたる時期、(三)其原理と教義との究問せられたる過渡靜思の時期、(四)科學世界の方今に到着したる時期——其中に有する眞理の萌芽は保存せられて學界永久の所有となると共に其日の數へられ得る最後の時期を經過し了れるものとなすなり。」

然り進化は其歩を止むるに至れり、但し當初其主張者の或ものによりて教えられたると全く異なる形式に於て其歩を止むるに至れり。進化は神の此宇宙に行動する方法の一なり、神の由つて以て万物を造り、由つて以て諸の世界を造り、由つて以て吾人の世界に於ける一切の生物の中に行動しつゝある所の様態の一なり。然り進化は神の地位を僭する事を得ず、万物の起源を説明する事を得ず。ダルフンが最初の大著述生物始源論の名は命名の錯まれるものなりとは人の熟く云ふ所なるが、全く種族始源の説明にあらずして既に存在せる生物の變化を説明

進 化 新 論

したるものに過ぎず。ダルフンも其靈性の萎縮し了れる前、自ら其大著生物始源論の末尾に書して「生命と其多様の勢力とは元來造物主によつて數種若くは一種の造物に賦與せられたるものなりとする見解、即ち此世界の運行しつゝ進むに際し、引力の定法に従ふて其單純なる始源より極めて美妙不可思議なる無限の生物の進化せられたると共に進化せられつゝありとする見解には殆ど莊嚴の意義あるを認む」とまで云へりき。

進化説の辨明し能はざる事物甚だ多し、物の三源、即ち物質、精氣、勢力の三者は進化の其行動を開始する以前、換言せば神の進化によつて其活動を実施する以前に於て既に存在したるものならざる可らず。此等三者は孰れも吾人に取つて解釋し能はざるものなればなり。

吾人が通常所謂物質物体なるものは顯微鏡を以てしてすら顯明する能はざる迄に微細なる分子と原子とより成れるなり。著明の科學者等

進 化 新 論

八

は此等の根本的原子若くは分子すら製作物たるの証跡を有する事を公言す。此等の元子分子は各其類に應じて差別ある形状を具し、之れが形成せる結晶は各其類に特殊なる側面と角度とを有す。如何に此等が至微至細なるかを例せんが爲めに蛋白質の一微片若くは生命の物質的基礎と稱せらるゝ原形質プロトプラスムの一微片を取つて之を撿せんか、二千五百万倍の擴大力ある顯微鏡を以てするも尙ほ顯明し難きまでに微細なり。而かも此微片は更らに二百万餘の分子を包有しつゝあるなり。而して其分子の一個は復た更らに八百八十二の原子を含有す、即ち炭素四百、水素三百十、酸素百二十、窒素五十及び硫黃燐の二よりなれるなり。此等原子は或一種の物体を形成せんが爲めには常に同一なる一定の比例を以て抱合するものにして、更に由來する所を見ざる種類、之れより以上變化變形し得ざる終局の種類なり。而して此等の原子は共に不可思議なる親和力、凝集力によつて結合せられて吾人の所謂物体なるも

進 化 新 論

九

の、固形なりとは雖も精氣的波動によつて滲透し得らるべきものを組織するなり。

精氣は云はゞ非物的物質とも稱すべき、不可思議にして遍滿なる、一切の感覺と一切の行動とに服役し、而して其物自身は靜止して認識す可らざるものなり。精氣は實に光と色と電氣との媒介物、無線電信をして可能ならしむるもの、亦た引力の導子にしてあらゆる他の物質を滲透貫通し得るまでに精微なるものなり。岩も山も其貫通力を阻碍する事能はず。且つ普通的にして空間は悉く之れによつて充實せられざる所なし。

勢力は其種々なる様態に於て、運動、親和力、凝集力とし、或は引力とし、電氣力として皆な吾人の説明せざる可らざる所、進化の決して解釋し得ざるものなりとす。

之かのみならず、此等三者は既にありとするも猶ほ他に重要な一物、

進 化 新 論

科學者等の進化によつて説明する能はずとするもの、即ち生命あり植物にせよ、動物にせよ、生命のある所には必ず原形質プロトプラズムなかる可らず、而して原形質は死せる物界には存在せず、又百万方人力を以て諸原素より之を構成せんとするも終に得可らざるものなり。

若し原形質のみを單獨に放置せば直ちに枯死消失して通常の無機物と化し去る、原形質には必ず機體と生命との結合なかる可らず、然らずんば、原形質は綿々として永く存在する能はざるものなり、斯く述べ來る所よりせば吾人は進化の開始し得る以前、即ち神の進化によつて其活動を實施し得る以前に於て物質と精氣と勢力との既に存在したる事を許さざる可らず、且つ此等三者に加えて原形質と機體と生命との亦既に存在したる事をも許さざる可らず、此等數者と神とのあるあつて然る後ちに始めて進化は開始し得るなり。

さりながら此等基本の創造せられたりと假定し、而して生命の最下形

進 化 新 論

式の現出したりと假定せよ、先づ試にプロトコカス、ニヴァリスの如きものを取つて例とせんか、此植物はグリーンランド及び他地方に生じ、繁殖の速なる忽ちにして廣漠たる溶雪地方の全面を掩ひ以て悉く血の如き紅色を帶ばしむるに至る赤雪苔なり、之を強力なる顯微鏡によつて檢するに薄き透明なる外皮の中に無色の液汁を充たせる球狀の細胞にして、其液汁の中には更らに深紅色の元形質あるを見る、時としては尙ほ數層微小なる細胞に分たる、を見る、直徑一インチの一万二千分の一に過ぎざる此等の細胞は何れも皆な完全なる植物なり、太陽の光と熱とは此の微小の細胞をして溶雪中に含める炭酸々化物及びアンモニヤの少量を分解して以て繁殖蔓衍し、能く一個の萌芽よりして幾多の平方里を掩蔽するまでに至らしむ、此は唯だ今日世界に存する多くの原始植物に於ける一例なるのみ。

此地上に於ける生命の斯かる單純なる形式よりして始まりしものた

進 化 新 論

十二
るは殆んど確たる事實に似たり。主要なる疑問は唯だ如何にして斯かる微物の能く複雑なる百體と耳目、神經、腦髓の如き錯綜せる機關とを具へ、心と其智情意の高貴なる勢力及び自覺、自由、良心とを有する人間にまで發達したるかの點に在りとす。人は決して斯かる單純なる細胞の中に、斯かる原始の萌芽の中には存在せざりし、潜在せざりし、否な人の百万分の一すら在らざりしなり。されば如何にして人は斯かる原始の細胞より開發せられたるかは吾人の問題とすべきものにあらず。凡て物の開發といふときは其の一物の中に豫め存在する所よりも更に多くを展出する。理由なきなり、或る論者によつて提出せられたる進化説は全然原因なくんば結果なし、結果は原因より大ならずなる大原則に反するものなり。前きに引用したるダルウインの「極めて單純の始源より美絶奇絶なる無限の生物は進化せられたり將た進化せられつゝあり」との言は立つ可らず。斯かる過程を指して「デヴェロプメント(發達)

進 化 新 論

とは呼び得べきも之をエヴガリユーション(進化)とは名づく可らず。此大問題に關して用ひられたる進化なる語は科學の會て行ひし最惡なる命名上の失錯なりと云ふべし。此は全くエヴガリユーション(進化)に非ずしてインヅァリユーション(添加若くは注入)なり。問題は實に人の複雑なる体格と之をして生ける不滅の靈たらしむる所の高尙なる勢力との如何にして能く原始の萌芽たりし單純なる原生動物ゾアに對して添加注入せられたるかの點なりとす。

進化論者は之を進化と名くれども彼等は概して諸多の要素と其添加注入の過程とを搜索するに於て其全力を用ゆ。彼等は圍繞物、自然淘汰、遺傳、自然の弄戲等を口にすれども彼等の最も勉むる所は常に如何にして大なる添加注入の成就されたるかを示さんとするに在るなり。而して今ま一切科學の指示する所にして、世界著名の科學者等が期せずして皆な共に達しつゝある一大結論は神あるに非ずんば、万物の大

進 化 新 論

原因あるに非ずんば、超絶的にして又内住的に、全智全能自主自動の大原因あるに非ずんば世界の説明は到底不可能なりと云ふに歸着するなり。斯かる大原因あるに非ずんば物質と云ひ精氣と云ひ勢力と云ひ將た原形質、機體、生命等一として解釋説明し得可らず。よし此等一切の根本的要素は存在せりとするも世界の中に常住し、古今に亘つて活動する神あるに非んば植物界、動物界に於ける生命の人間にまで躋登したる一連發達の過程終に説明し得可らず。何れの方面より之を見るも大なる無限の添加者、注入者は無かる可らず。一たび斯の如き神的要素の存在を許し且つ其無限の智慧と企圖とに従ふて隨時隨處に創造を施すものとせば其單純なる原生動物をして發達進化して人間たるに至らしむる事あり若くは天使たるに至らしむる事ありとするも吾人は之を信するに於て更らに困難あるを見ず。而して其實施せられたる方法の或は遲緩、漸次、一定の經過たりしか、或は時に勢力の一層多大な

進 化 新 論

る添加あざりしか、若くは新模型の絶對的創造あざりしか等如何の若きは則ち疑問の存する所にして進化論者間に於て大に意見の差違ある點なりとす。

現に無神的若くは自然神的進化論者によつて論議せられたる此の間に關する極端説より著き反動の起れるを見る。大なるインヴァリオン(注入)即ち創造的作用の時期の再三再四起りたりとは學者等の殆んど一般に認知するに至りし事實なりとす。

ミヴァルト、レコント及び他の數人は緊急時期即ち急劇なる進化の時期と極めて沈靜の時期との互に代る代る起るものなる事を云ふ。或ものは之を稱して瘳變的又た激變的進化と云ふなり。斯かる急劇なる進化の時期ある証跡は甚だ多大にして科學的進化論者は皆な其之れあるを許せり。ジョン、フィスクは其最後の著書の一なる「永世」八十四ページ八十五ページに云ふ所、左の如きものあり。自然は飛躍を爲さずてう格言

は眞理を距る甚だ遠し。自然の行動は大飛躍を爲さんとして之れが準備の爲めに長日月を費すを常とす。槽池の水は永き懶き時間に於て一寸又一寸徐々として増加し來り一旦其溢るゝに至るや巨大なる機關の一系列は俄然其運轉を開始す。圓錐体に於ける其地位の變するに従ふて楕圓の心差は遅々として加るも尙ほ曲線の性質は絶えて變する事なし。而かも更に一小變轉の起るや遽かに有限の楕圓は無限の雙曲線となり、吾人が觀念の微弱を嘲りつゝ其永遠の進路に疾走す。吾人の無知を以てしても斯る比較の助けによりて吾人有限の生命が着々發達して無限の生命となる喫緊の要點に達し得るの可能を悟ることを得べきか、と吾人若しフイスクの爲したる如く此一切經過の背後と内部とに人格的添加者を立てんか、一般の發達を説明するに於て、新形式の急遽の出現若くは不滅の靈たる人類の出現をすら説明するに於て絶えて困難の存するを見ず。

今日の有神的進化論者は一大添加者、開發者の宇宙になかる可らざるの事實を認識するのみならず、更らに斯かる添加者の創造力に等き行動を以て再三再四其手を自然の上に加へたるの事實をも認識す。ダルフンすら自ら生命は本來造物主によつて數種若くは一種のものに賦與せられたるならんと云ひしは吾人の前に見たる所の如し。ワルレーヌは進化の連鎖には少くとも三個の破斷ある事を發見す、一は生命の起源、二は動物的感覺と意識との起源、三は人類が高貴なる能力の起源是れなり。されど斯の連鎖には尙ほ他の困難にして破斷の如く見ゆるもの多く、科學者等をして神の特別なる勢力の數ば添加せられし事を信するに至らしめたり。例へばカムブリアン期に於ては遽かに三葉虫の其最も完全に構造せられたる複雑なる眼目を具へて出現し、シルリヤン期に於ては遽かに頭足類の出現あり。シルリヤン岩層には脊椎動物の痕跡だもあらざるに其直上層デヴァニヤン層には完全な

進 化 新 論

る魚類の無數に存在するあり、而かも發達未熟なる中間物の痕跡なし。其他吾人はカルボニフェラス期に於ては両棲動物、陸上蝸牛、多足動物の出現、メソゾイク期に於ては有袋哺乳動物の出現、エオセネ期に於ては胎盤哺乳動物の出現を見る。而して此等の動物は遽かに多數を以て、完全の体格を以て出現し、絶て中間若くは未熟のもの、痕跡を遺さざるなり。

此等の例證を擧げ來れば、万物の造主が創造作用に等しき行動を施すに方つて時に潮汐の差別ありし事を示して餘りあるべし。漸次にして、一定なる、間斷なき發達は一の根本的至小動物より一切万種の生物を現せりとする説は更らに他の困難あるを免れず。全然新たにして完全に構造せられたる種族の遽かに現はるゝありて其之れに到達したるべき未熟の種族の遺跡なきが如きは之を何とかせん。殊にモテラより人に至るまで各段階の連續せる系統を建設せんとせる計畫は其系統

進 化 新 論

には大間隙ありと云ふ難地に陥るを如何せんや。ヘッケルは單に吾人は彼等が曾て存在したる事を假定せざる能はずと云ひ去る。氏は地質學時代より發達し來れる人類が祖先の系統を數へて、ラウレンシャン期の初より近代期に至る一連二十一段階を提供す。而かも其十個は毫も化石として知られざるもの、其他のものも吾人の知る限に於て氏が當てたる時期には屬せざるものなり。氏は此等消失せる種族の存在し發達したる陸地は何時か大洋の底に沈没したるものならざる可らず、故に現世界には其痕跡を止めざるなりと附會するに至れり。されど此の如きは學説と云ふ可らず全く証明なき空想のみ。假定のみ。然らば進化に關する有神科學思想の現時に於ける趨向否な歸結は如何之を條述せば左の如し。

(第二)進化は造物主が其世界に於て行動し來れる將た尙ほ行動しつゝある所の過程の一なり。

進 化 新 論

第二進化は實に新たなる物力、勢力特性の間斷なきインヅォリューション(注入)若くは定期のインヅォリューション(注入)によれる發達の一なり。造物主大添加者は常に其過程を指導して一定の進路を取り、斷えず大目的に向ふて上進せしむ。

(第三神は實に萬物の造主なり。一瞬の間に之を創造したりとするも或は何等他の方法を以てしたりとするも或は進化の法によれりとするも其造主たるに於て異なる事なし。否な神を以て進化によれる造主と見るは彼の造主を其世界より分離したる自然神の見解よりも尙ほ偉大にして尙ほ快適なる見解なりと云ふべし。神は超絶的なり。神は世界にあらず。世界は神にあらず。しかも神は其世界の中に在り。神は世界に於ける一切の物力、引力、凝集力、電氣力、及び光と熱との源泉なり。神はあらゆる起源の創始者なり。神は斷えず若くは時々に必要な勢力を添加し、萬物をして下等より高等に進達せしむる、インヅォルヅァア(注入)

進 化 新 論

者にして常に此等一切勢力の中に在りて之をして上るあつて下るなく其至上なる目的と企圖とに向ふて着々一定の進路を取らしむ。

(第四近代科學の一致して人類は其高貴なる性質、其不滅なる天資、又た恐らくは甚だ重要ならざれども其身体も共に全く特殊創造の結果、乃ち勢力インヅォリューション(注入)の産出にして其之れあるが故に下等生物と差別ある所以のものなる事を指示するは吾人の特に看取する所なりとす。

物質、精氣、勢力の製作に關し原形質機體、生命の起源に關し特殊なる神の創造作用ありとせざる可らざるものあるに方つて、岩層に刻せられたる記録の中に數多の下等生物の創造及び人類其物の創造の証蹟、換言せば一瞬的發達の証蹟あるに方つて、吾人は何の故に安じて神は特別なる意義に於て吾人の造主、吾人の父たりと云ふ信念、神は其像に似て人を造り生氣を嚙入し依て人をして生ける不滅の靈たらしめたり

と云ふ信念を保たざるか、是れ決して非科學的の信仰にあらず、能く科學の教示する萬般の事と一致し、人間に傳來せる創造の大詩篇(創書記を指す)即ち人類歴史の神の人間に下せる天啓の序言として尊ぶべき詩篇と一致す。此の詩篇は頗る天啓の徵證を有す。

人若し天啓なくして其記録時代に於ける人間の立脚地より此の記録を爲したりとせば植物の創造を太陽創造の後に置きたりしならん、第五日を動物の創造に當て第六日の全部を人類の創造に當てたりしならん、光の創造と太陽の創造とを分たざりしならん、星辰のあらざる蒼穹の記事なかりしならん、古人は星辰と蒼穹とを分つ可らざるものと解し居たり、且つ動物界より著き以前に植物界の記事を置かざりしならん、今日の科學時代を去る數千年以前に誌されたる此の記録の一切重要な點殊に其接續の順序に於て岩層及び天体に刻せられたる所と吻合するものは果して何の故とするぞ。

進 化 新 論

上述せる人類の起源に關するの見解は博士ザリ、エー、ゴルドンの説よりも慥かに尙ほ多く科學的に尙ほ多く信すべきものなりとす。同氏は「今日のキリスト」なる神學上の一論文を草し、其中に「人類は數百万年の間に於て漸次下等動物より進化したるなり、ヘブライ以前、歴史以前の世界は想像し能はざる程に廣袤を有し且つ感銘すべきものにして其民數に對照すれば歴史以來の全人口の如きは單に大海の一滴にだも當らざるなり」と云ひたりき。

(第五)上述せる創造に對する吾人の見解は人類をして殆んど無限の威嚴を帯びしむるものなり。無算なる準備時限の後に於て始めて人類に恰當せる、人類の要望と慾求とに副ふ一切の物の存する住處、道德的存存者として人類の教習と訓練と發達とに恰當せる場所は既に設備されたるなり、是れパラダイスにあらず、パラダイスなりとせば斷えず其罪と死とを憶起し依つて悔改して神に復歸するの必要ある人類の如

進 化 新 論

き種族には適せざりしならん人を罰せんが爲めの煉獄に非ずして、改善改良の爲し得べき品格修養の行はるべきの場所は既に設備し置かれたるなり。總ての準備の了れる時神は其意に隨ふて物界の絶頂極處たる最善者を創造したり、即ち物界と靈界との連鎖たるべきもの、下等より高等に進み身体の死を超越して不滅の域に達し得る唯一の存在者、特に神の像に似て造られたる存在者、神の親く其靈と等しき靈氣を嚙入し依つて生ける不滅の靈たらしめたりし唯一の存在者を起したるなり。

人類の起源此の如きものあり、故に吾人は特殊の意義に於て神の子たるなり。神のノアに對して「生ける一切の動物は汝等の食たるべし」と云ひ給ひしと同時に「凡そ人の血を流すものは人其血を流さん、人は神の像に造られたるが故なり」と命じ給ひしも實に是れが爲めなり。

キリストが吾人人類の性質を取り給ひしも是れが爲め、吾人がキリス

進 化 新 論

進 化 新 論

トによつて特殊の意義に於て密接にして完全なる態度に於て神に結合し能ふと云ふも亦是れが爲め、吾人が見らるゝが如くに見得る來世に於て此結合の更に一層密接なるべしと云ふも亦是れが爲めなり。使徒ヨハナが「視よ我儕稱へられて神の子たる事を得、是れ父の我儕に賜ふ何等の愛ぞ、世は父を識らず是によりて我儕をも識らざるなり、愛する者よ、我儕今神の子たり、後如何、未だ露はれず、其現はれん時には必ず神に肖ん事を知る、そは我儕其眞狀を見るべければなり、凡そ神に由る此望を懷く者は其潔よきが如く自己を潔くす。」〔約翰第一書三章一二三節〕と述べしも亦實に是れが爲めなり。

人類に至れる迄の發達の過程に於て人類以前の各個は皆な淪没し去りたるなり。彼等は恰も高等なる造物即ち存在者にまで達する踏石たりしに過ぎざりしなり。人類の一たび入來するや茲に無限の進路は開かれぬ人は神の像に造られて神自身の生命と並行して進むべき無終

進 化 新 論

不滅の生命を具へキリストの所謂更に天の使の如かるべきものなり。來世の發達は人間種族の廢趾の上に起るべきものにあらず。人類の各個は皆な限りなき永遠の間キリストが我儕が父の住宅の中に備へたる實地學校に於て着々發達進歩すべきものたり。天文學者の語る所によれば寫眞暗筐の薄皮が顯はす太陽の數は二十億以上に及ぶも尙ほ實際限を見ずと云ふ。さらば主キリストが此等神の像に造られ斯かる宇宙に斯かる無終の未來を有する不滅者の一は吾人が住する此地球と名づくる一小礫の全部よりも尙ほ多くの價值ありと云ひ給ひしも亦敢て怪むに足らざるべし。

吾人は人類の如き存在者の造られし時に神が特殊なる創造作用を施したりと云ふに於て更らに怪しむべきものあるを見ず。此事實を思念する毎に吾人は未だ曾て生活に對する新趣味、新勇氣、新希望、新熱心を得來らすんばあらず。

進 化 新 論

此事實を思念する毎に吾人は亦たキリストの心と精神とを得るに於て一段の進歩を促すものあるを感ずキリストの實現せられたる最下最微のものにすら存する人類の威嚴と價值との幾分、同じく又たキリストの實現せる罪の故に神より離れたる人類の危険の幾分、人を助け人を救はんとするキリストが熱心の幾分、キリストが愛の幾分、其忍耐の幾分、其聖別と希望との幾分を得るに於て是れ亦た一段の進歩を促すものあるなり。

新 化 進 論 終

94

94
104

明治三十六年十月二十二日印刷
明治三十六年十月二十四日發行

著者 ゼー、デー、デピス

發行者 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福永文之助

印刷者 横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

發行所 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
警醒社書店

印刷所 横濱市山下町八十一番地
福音印刷合資會社

97
104

